

ロールプレイと描画を用いた「コミュニケーション体験的理解促進プログラム」 の試行と検討

－高校福祉科におけるプログラム実施後アンケートの自由記述の質的分析－

○ 愛知教育大学 氏名 佐野 真紀 (003248)

キーワード3つ：高校福祉科、コミュニケーション、共感

1. 研究目的

本研究は、「体験的コミュニケーション理解促進プログラム」を構築する研究の一環として、高校福祉科の生徒を対象にプログラムを試行し、高校生にとってこのプログラムがどのような体験をもたらしているかを探索することを目的としている。

専門職養成教育においては「利用者本位」を大切にすることが教授されているが、近年はユマニチュードやオープンダイアログなどのように、人を人として尊重するケアが注目を集めている。これらの方法は、単なるスキルではなく、その哲学をふまえて自分の在り方をコミュニケーションに反映していくスタイルをとる。

ところで高校福祉科のカリキュラムにおいては、利用者本位のケアについて様々な科目の中で言及されているが、特に利用者理解やコミュニケーションについては、介護福祉基礎、コミュニケーション技術、こころとからだの理解などで取り上げられている。介護におけるコミュニケーションの重要性を評価していることが推測される一方で、コミュニケーション技術のテキストでは、NLP（神経言語プログラミング）をはじめとする傾聴のスキルを学ぶことが中心となっている。しかし、スキルを一つ一つ学んで身体化するには時間がかかり、高校の授業の中では個人の中でスキルを統合するところまでフォローできないことが難点である。そこで、スキルを積み上げてから統合するよりも、快いコミュニケーションの循環の中で自らを表現し、受け入れ/受け入れられる体験をすることが、コミュニケーション技術の習得の一助となるのではないかと考えた。

2. 研究の視点および方法

本研究では、高校福祉科の授業の中で実施することを想定し、100分（50分授業2時間連続）で行った。プログラムの主な内容は、ロールプレイ（面接場面を想定し、思い方と身体の状態のつながりを体験する）、描画を用いたグループワーク（3枚の絵を8分間無言で見て感想を話し合ったのち、絵の印象を絵で表現し、さらに話し合う）によって構成されている。授業の前と後に清水・今栄（1981）によるSTAI（状態－特性不安検査）日本語版のうち状態尺度（A-State）を用いたアンケート調査を行い、プログラム実施前後の状態の変化を確認した。また、授業後には事後アンケートを行い、プログラムの進行順に感想を尋ねる自由記述を4問用意した。自由記述の回答を質的データ分析法を用いて分析し、生徒がこのプログラムの体験をどのように意味づけているかを探った。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、文書と口頭で研究概要について福祉科主任に説明を行い学校長の下承を得た。受講する生徒には授業前に説明書と事前アンケート用紙を配布し、アンケートへの回答は任意であること、無記名で行い回答は統計的に処理されるため個人が特定されないこと、学校の成績とは無関係であること、回答はいつでもやめることができ、答えたくない質問には答えなくてもかまわないことを書面で伝えた。アンケートの回答をもって同意とみなした。以上の内容は愛知教育大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(AUE20240406HUM) 本発表に関して開示すべき COI はない。

4. 研究結果

2023年に高校福祉科2年生37名、2024年に高校福祉科1年生27名、2年生52名を対象にプログラムを実施した。実施前と実施後にアンケート調査を実施し、参加者全員から回答があった。A-State得点の平均値は、プログラム前が41.78、プログラム後が35.76であった。プログラム前後のA-State得点に対して、対応のあるt検定を行ったところ0.1%水準で有意であった($t(78)=6.22, p<.001$)。同時に行った事後アンケートの自由記述では、次の4問を尋ねた。①絵を眺めた後でメンバーの感想を聞いてどう感じたか②メンバーの絵を見て語り合ったときどう感じたか③絵を重ね合わせて眺めたときどう感じたか④全体を通してどのような感想を持ったか発見や気づきにはあったか。有効回答数は、①115件②113件③111件④107件であり、これらについてコーディングしたところ、104コードを抽出した。コードの類似性に従って抽象化したところ、11のカテゴリーと23のサブカテゴリーが生成された。カテゴリーは以下のとおりである。【差異への気づき】【違いの受け入れ】【差異の肯定的なとらえ方】【絵から心理を推量】【コミュニケーションの深まり】【新たなものの受け入れ】【発見と気づき】【こころのあり方】【評価】【ネガティブな反応】【ポジティブな反応】

5. 考察

プログラム前後のSTAI(A-State)の得点では、プログラム実施後には有意に得点が下がっていることから、このプログラムを実施することによって参加者の不安が軽減されたといえる。多くの生徒が安心して取り組んでいることが示唆された。自由記述の問いごとにカテゴリーを見たところ、それぞれの問いに特徴的な回答が見られ、次のような指摘ができた。このプログラムがもたらした体験は、①自他のとらえ方の違いに気づき、それを認めて受け入れていること、②とらえ方の違いの気づきに加え、異なる考えを肯定し、コミュニケーションの深まりが見られたこと、③絵を重ねることで見方が変わり、新たな視点を得ていること④以上3点に加えてこころのあり方の学びが指摘され、ロールプレイの内容が強く印象付けられていることがわかった。(JSPS 科学研究費 JP21K02546)

参考文献：清水秀美・今栄国晴(1981)「STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版(大学生用)の作成」『教育心理学研究』29(4),62-67